

琉球大学学術リポジトリ

布教事業団(L'Œuvre de la Propagation de la Foi)における日本関連資料について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部国際言語文化学科 (欧米系) 公開日: 2016-08-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮里, 厚子, Miyazato, Atsuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002008387

布教事業団 (L'Œuvre de la Propagation de la Foi) における 日本関連資料について

宮里 厚子

1. はじめに

フランスにおけるカトリック関係の宣教団体というと「パリ外国宣教会」がよく知られている。そこに収蔵されている古文書等には多くの研究者がすでに閲覧・研究対象とし、また最近では、これらの資料のデータベース化も進んでいる。一方、L'Œuvre de la Propagation de la Foi (以下、「布教事業団」¹または「事業団」)は1822年にリヨンで設立されたカトリック教の団体で、宣教の一翼を担ってはいるが、パリ外国宣教会とは質の異なる存在意義を持つ。民間人のアイディアによって創設されたこの団体は、パリ外国宣教会から派遣される宣教師たちに財政面におけるサポートを行っていた。現在はローマカトリック教会の一機関として機能しているが、リヨンを本拠地としていることは設立当初から変わらない。

布教事業団の古文書室に収蔵されている資料は、世界各国に派遣された宣教師たちから送られた手紙や報告書、写真等であり、パリ外国宣教会の資料より事務的な内容のものが多く、実務的・物質的な側面から各国における宣教の様子をうかがい知ることのできる貴重なものである。また事業団のもとには、資金援助のお礼として手紙だけでなく各地域の民芸品や装飾品等の品々も贈られており、民俗学的にも価値の高いオブジェを多く所有していることもこの団体の特徴である。

本稿では、布教事業団が収蔵または所有する資料やオブジェについて見ていくが、これは平成26年1月と平成27年1月に筆者が現地へ赴いて行った調査を基にした報告である。調査は平成24-26年度科学研究費助成事業「交錯するまなざし—琉球・沖縄をめぐるトラベルライティングの総合的研究」(研究代表者・山里

勝己)における研究分担者(フランス側資料担当)として行ったものであり、おもな目的は琉球に関わる資料の有無を調べることであった。残念ながら、布教事業団における調査では琉球に直接かかわる資料はほとんど見つけることはできなかったが、当団体の所有する日本関係資料は幕末から明治にかけてのキリスト教再布教期から1930年代頃までの日本におけるキリスト教の伝播状況を知るうえで貴重なものであり、日本ではこれらの資料の存在はもとより、l'Œuvre de la Propagation de la Foiという団体自体があまり知られていないと思われるため、その概要をここで紹介していきたい。

2. l'Œuvre de la Propagation de la Foi について—設立から現在まで—²

布教事業団は、1822年にリヨン在住のカトリック教徒ポーリン＝マリー・ジャリコ(Pauline-Marie Jaricot, 1799-1862)の活動を基に設立された。熱心な信者だったポーリン＝マリー・ジャリコは、1819年から宣教師への資金援助を実現するため、信者10人を1グループとしてそのリーダーがメンバーから1週間に1スーズづつ集め、さらにその10人グループを10グループ、つまり100人ひとまとめにして会費を徴収、さらにそれを1,000人単位のグループへ束ねる、という集金システムを確立した。この方法を引き継ぐ形で1822年に布教事業団が発足するのである。1週間に1スーズという安価で比較的簡単な方法で宣教活動に貢献できるこの方法は、すぐにフランスはもとより、ヨーロッパそしてカナダなど新大陸にも波及し、数多くの会員が集まったようである。事業団は資金の主たる供給元としてヨーロッパの宣教事業においてじきに大きな位置を占めるようになり、「布教事業中央委員会」が各宗派への資金の割振りを決めていたということである。したがって、布教事業団には資金援助要請、援助へのお礼などといった内容の手紙が宣教師たちから寄せられた。

また、布教事業団の顕著な仕事としてもう一つあげられるのは、世界各国に派遣された宣教師たちから送られてくる手紙や報告書をまとめ、出版したことである。最初は数ページからなる *Nouvelles reçues des Missions* という冊子が年1回発行され会員に配られていたが、すぐに *Annales de la Propagation de la Foi* というタ

イトルで年に3~4回の頻度で発行される会報の形をとるようになった。会員となっているカトリック教徒にとっては、遠い異国の文化や風習、ときには宣教師たちの苦難に満ちた布教の様子を情報共有する手段としてかなり好評を得ていたようで、1850年には外国語版も含めると18万部を発行していたということから、その会報の人気の具合と布教事業団会員数（出資者）の多さをうかがい知ることができる。この *Annales de la Propagation de la Foi* の反響に関してある作家が、「カトリック教会の歴史の中で初めて、小さな村までその反響が届くようになった宣教の闘いは、みんなのそして各人の関心事となった」³ と表現しているように、この会報のおかげでフランスの小さな村々にまで遠い異国での宣教活動の様子が伝わるようになり、出資者たちは自分がそこに貢献していることを実感し、さらに熱心に宣教活動を支援するようになったということである。

布教事業団はさらに、1868年にはイラストや写真入り雑誌 *Les Missions Catholiques* も発刊し、地理学、民俗学、動植物学など様々な分野において世界各地の幅広い情報を画像入りでフランスやヨーロッパの会員に知らせる役割を果たした。

現在 *l'Œuvre de la Propagation de la Foi* は、フランスの他地域で同様に発足した3団体と一緒にローマ教皇庁の1機関 *Œuvres Pontificales Missionnaires* のフランス支部を形成し、リオンを本拠地としてパリやルルドに事務所を置いて活動を続けている。

3. 収蔵資料：文書編

リオンの布教事業団本部には古文書室があり、宣教師たちが世界各国から、または帰国中のフランス国内から送った手紙や報告書などが保管されている。他にも、布教事業中央委員会の議事録や各宣教団体への資金の割当額とその決定理由等の文書も保管されているため、これらの資料のほうに興味を持つ人もいるかと思われるが、ここでは宣教師たちが書いた記録に絞って注目したい。

古文書室の資料は、パリの事務所で保管されていた「パリ・コレクション」とリオン本部の「リオン・コレクション」に分けられている。日本関連の文書はど

ちらも「Série E」と題されたファイルにあり、東京、大阪、長崎、函館、新潟、四国というように、地方ごとに分けられている。各ファイルに何通収められているか推測しかねるが、単純に積み重ねられたこれらの手紙の束は、少ない地方のもので厚さ2センチ程度、量の多い地方のファイルでは厚さ10センチ近くはあったかと記憶している。さらにそれぞれの手紙が油紙のように薄い便箋に書かれているため、手紙の数はとにかく相当数に上る。日本関連文書は年代的には、1840年代から1920年代頃までのものがおもである。

その内容は、上述したように、資金援助の要請や受け取った援助に対するお礼であり、布教事業中央委員宛てが多い。手紙のなかでも、地元住民を改宗したエピソードなど宣教の様子を報告したものは *Annales de la Propagation de la Foi* 等の出版物に掲載されている。一方、リヨンの事業団宛てに送られた手紙でも、現在ではパリ外国宣教会に保管されている手紙もある。念のためリヨンの古文書管理担当者に、パリ外国宣教会と布教事業団の収蔵文書の違いを尋ねてみたが、やはり、前者の保管文書は「spirituel (精神的)」な内容がおもであり、後者はより「pratique ou matériel (実用的・物質的)」なものであるとの返事であった。

日本関連の書類の中には、例えば、「Nagasaki, Iwojima」の教会が台風で倒壊したため、再建のための支援を要請したいとする手紙があり、教会の写真も添えられている。あるいは、日本開国前に琉球に滞在し、後に函館で活躍していたメルメ＝カションという宣教師が、日英仏辞典を出版するための資金援助を乞う手紙のコピーも見られた(原本はおそらくパリ外国宣教会に保管されている)。この手紙は出版資金の一部しか助成できないとする中央委員会の返事のコピーと対をなしている。また、厚紙にタイプされた紙には、宣教師たちがそれぞれの教区の信者数、新たな改宗者(大人・子供の内訳あり)、洗礼を受けた者の数などを定期的に報告したカードも含まれており、キリスト教解禁後、各地域でカトリック教がどの地域でどの程度日本に広まっていったか知る手助けとなるような資料である。

先述したように、今回の調査の目的は琉球関係資料の発掘であったため、筆者が閲覧した手紙はおもに琉球に滞在経験のある宣教師たちのものだけだったが、それ以外の膨大な量の手紙や報告書を調査することで、日本におけるキリスト教再布教期の新たな側面を発見できることが期待できる。

4. 収蔵資料：写真編

布教事業団の古文書室には、写真コレクションもある。日本関係の写真は文書同様、地方ごとにファイル分けされている。残念ながら、写真の撮られた年代が明記されているものは少ないが、多くは1930年代前後に撮られたものとみられる。写真は大きく分けて、1) 教会の建物や教会関係者、教会付属の病院・孤児院等の写真、2) 日本人や日本の日常生活、年中行事をとらえた写真、3) その他、昭和天皇や皇族、自然災害に見舞われた町の様子などの写真である。

教会関係の写真に関しては、フランス人宣教師たちが建設に携わった教会の写真も多い。特に九州地方の教会の写真には、福岡では久留米天主堂や門司天主堂、長崎では浦上天主堂をはじめ堂崎教会、大曾教会、福見教会などの写真が含まれている。また、宣教師たちが運営していた病院、特にハンセン病患者のための療養施設や孤児院の写真からは、当時のヨーロッパの宣教師たちが宣教活動だけでなく、福祉活動にも力を入れていたことが理解できる。同様に、「熊本市上林高等女学校/上林女子商業学校 タイプライター教授」と題された写真には、タイプライターを前にする女学生たちの後ろにシスターたちの姿も見られ、フランス人宣教師たちが教育、特に女性の教育にも貢献していたことがわかる。

さらに、当時の宣教活動で重要な役割を担っていた活版印刷の施設もいくつかの写真に収められており、裏には「長崎、無原罪の園、聖母の騎士の印刷所」と書かれ、右下には「1937」と年代も記されている。数枚ある印刷所の写真の一葉には裏に以下のような説明書きがある。

「日本におけるカトリック印刷所

出版物の重要性は誰もが知るところである。日本における宣教師たちは、本や新聞、雑誌を印刷する多くの印刷所を手掛けてきた。東京にはカトリック出版事務所が存在する。

構成のなかでも大きな困難の一つは、日本の文字が表意文字であるということである。地元の聖職者に任された長崎司教区のこの小さな印刷所では、フランスススコ会のポーランド人修道士が5,000もの文字を簡単に見分けることができる。」

このような写真からは、当時のヨーロッパ人たちが世界各地の宣教のためにいかに潤沢な資金を提供していたのかがい知ることができる。写真に収められている教会や施設は、天災や戦争でもはやその姿をとどめていないものも多いようであるが、宣教師たちの活動が施設建設にとどまらず、近代日本における福祉や教育の発展に少なからず貢献したということをこれらの写真から読み取ることができる。

布教事業団の写真コレクションにはこの他にも、日本人や日本の生活の様子を撮った興味深いものがある。籠で移動する男性や飴売りと子供の写真、家族写真、教会での結婚式後の集合写真、「小さな日本の天使」と題された祈るポーズをする愛らしい女の子、アイヌ人の夫婦、大阪の商店街など、北は樺太から南は奄美大島まで、人々の暮らしを垣間見ることができる写真となっている。また、コレクションには愛馬「吹雪」に乗る昭和天皇や天皇の御前で体操を披露する女学生たち、など皇族や皇族が参加した行事の写真も含まれている。一方、1927年3月7日の北丹後地震後の倒壊した家々や1934年の函館大火後の街の写真も見られる。これらの写真は、宣教師たち自身が撮ったものばかりでなく、市販のポストカードのようなものもあると思われる。いずれにせよ、宣教師たちが何に興味を持っていたのかがい知れる写真ばかりである。

5. オブジェ編

布教事業団には、援助に対するお礼として報告書とともに世界各地の様々なオブジェが送られ、もしくは直接届けられてきていた。これらのオブジェは具体的には、各地域の信仰の儀式等に使われる道具、武器、民芸品や装飾品などの日常生活で使われるもの、楽器などに大別できる。これらを展示する展示室の存在は一番古い記録で1888年だということである。それまで事業団の事務所の狭い棚に積み重ねられていたこれらのオブジェは、この時期から一般の人々にも公開されるようになった。1892年に団体の本部が同じリヨン市内の少し広い場所に引っ越してからは、さらに巡礼の途中で立ち寄る人も増えたという。しかし、この展示室は1892年以降1960年に閉鎖されるまで、展示方法等がほとんど見直されない

ままで、日当たりの悪い部屋で世界中から集まった珍品が来訪者を迎えていたということである。

その後約 20 年の閉鎖期間を経て、オブジェの中でも特に民俗学的価値の高いものがリヨンの自然史博物館に常設展示されることになった。その自然史博物館も 2007 年には閉館したのだが、布教団のコレクションは 2014 年 12 月に開館したコンフリュオンス博物館 (le Musée des Confluences) に移管されることになった。この博物館は、リヨン市内のローヌ河とソーヌ河が合流する Confluence 振興開発地区の目玉として建築され、布教事業団のコレクションのほか、老朽化のため閉館されていた自然史博物館やエミール・ギメ博物館¹のコレクションを収蔵している。

宣教師たちから送られてきたオブジェは、旧自然史博物館に収蔵された際にカタログ化され、さらに新博物館への移管に伴い、その出処や送られてきた背景など宣教師たちの手紙や報告書を頼りに本格的な調査が行われたということである。このような経緯を経て、現在 2,000 点以上のオブジェがコンフリュオンス博物館に収蔵されているわけであるが、実際には布教事業団のコレクションで展示されているものは残念ながらそれほど多くない。事業団の関係者にこの件について尋ねたところ、博物館側は数年後に布教団のコレクションで特別展を開くことを示唆しているという。いずれにせよ、博物館のホームページによれば、申請すれば研究者等は布教事業団のコレクションが見学可能である。

ところで、コレクションには具体的に日本のどのようなオブジェがあるのだろうか。多くのオブジェはコンフリュオンス博物館の倉庫に保管され一般には展示されていないが、博物館側が *Objets des terres lointaines* (『遙かなる地のオブジェ』) とのタイトルで地域ごとのオブジェを紹介する本を出版している。この本には日本から送られたオブジェ 7 品が掲載されており、フォルカードから 1944 年ごろに送られたという布をはじめ、江戸の庶民の姿を鮮やかに模った素焼きの人形や 3 体の仏像、そして笠 1 枚が紹介されている。1960 年代から 50 年以上の紆余曲折を経てやっとこれらのオブジェの所在が決まったわけであるが、いまだ常設展示で見ることができないのは残念である。とりあえずは、コンフリュオンス博物館が事業団所有の品々を対象に特別展を開くのを待たなければならない状況である。

6. おわりに

以上、リヨンにある布教事業団の日本関連の資料についてかなり大まかではあるが紹介した。これらの資料は日本ではあまり知られていないと見られ、今回はあまり詳細に説明せず、その存在を知らせる程度にとどめた。ちなみに、これらの資料は手つかずのまま眠っているわけではなく、リヨンの布教事業団古文書室には、絶えず資料を閲覧する者がおり、例えば筆者が写真コレクションを閲覧しに行った際も、リヨンの歴史学専攻の学生が論文を書くために日本関連の写真を見に来ていた。今後は日本側の研究者でもこれらの資料を翻刻・精査するなどして研究すれば、1840年代から1930年代頃の日本におけるキリスト教再布教について何らかの新事実が明らかになる可能性は充分であると推測できる。

謝辞

本研究ノートのもととなる現地調査において、フランス・リヨン在 *Œuvres Pontificales Missionnaires* には快く調査を受け入れていただき、ご協力いただきました。心より感謝申し上げます。

註

- 1 *L'Œuvre de la Propagation de la Foi* の日本語訳に関しては、宣教師たちがこの団体の委員に宛てた手紙を、フランシスク・マルナス著『日本キリスト教復活史』を訳した久野桂一郎氏が、「布教中央事業委員会委員宛て」と訳していることを参照し、ここでは「布教事業団」と訳した。
- 2 この布教事業団の情報に関しては、おもに事業団の所有するオブジェを紹介した本 *Objets des terres lointaines -Les collections du Musée des Confluences-* と同団体のホームページを参照した。
- 3 Wikipédia « Missions catholiques au XIXe et au XXe siècle » に、『パリ外国宣教会』という本を書いた Jean Guennou の言葉として以下の引用がある。
«...pour la première fois, dans l'histoire de l'Église catholique, le combat missionnaire dont l'écho parvenait jusqu'au moindre village, devenait l'affaire de tous

et de chacun... » (本文中の日本語文は拙訳)

- 4 東洋美術のコレクションを展示するエミール・ギメ博物館は現在パリのみにあるが、ギメの出身地であるリヨンにも存在していた。

参考文献

フランシスク・マルナス、『日本キリスト教復活史』久野桂一郎訳、みすず書房、1985.

ouv. coll. *Objets des terres lointaines -Les collections du Musée des Confluences-*, Silvana Editoriale, 2012.

« Missions catholiques au XIXe siècle et au Xxe siècle »,

https://fr.wikipedia.org/wiki/Missions_catholiques_au_XIXe_et_au_XXe_si%C3%A8cles

(2015年10月22日閲覧)

« Musée des Confluences », <http://www.museedesconfluences.fr/fr> (2015年10月22日閲覧)

« Œuvres Pontificales Missionnaires », <http://www.opm-france.org/> (2013年11月26日閲覧時)

Résumé

La présentation des documents relatifs au Japon dans l' Œuvre de la Propagation de la Foi

Atsuko Miyazato

Ce rapport de recherche a pour but de présenter les documents et les objets qui appartiennent à l' Œuvre de la Propagation de la Foi fondée en 1822 à Lyon. Il s'agit d'un organisme qui, en collectionnant les dons de leurs abonnés catholiques, finance les activités des missionnaires dans le monde. Ici, après avoir expliqué la nature et le rôle de l' Œuvre, nous présentons les lettres et les photos qui ont été envoyées par les missionnaires du Japon, principalement entre les années 1840 et 1930. Nous parlons également des objets japonais qui appartiennent à l'organisme mais qui sont maintenant conservés dans un nouveau musée lyonnais. Ces documents et objets, voire l'existence de l' Œuvre de la Propagation de la Foi semblent en effet assez méconnus au Japon. Nous espérons donc, avec ce rapport, faire découvrir ces témoins de l'histoire si intéressants.